



TITLE:

ディルタイの歴史研究に於ける資本主義観

AUTHOR(S):

出口, 勇藏

CITATION:

出口, 勇藏. ディルタイの歴史研究に於ける資本主義観. 経済論叢 1934, 39(4): 593-602

ISSUE DATE:

1934-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130503>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 四 第

卷九十三第

行發日一月十年九和昭

論 叢

鑛業税に就きて……………

法學博士 神戸正雄

不全競争について……………

文學博士 高田保馬

經營形態としての共販會社……………

經濟學博士 小島昌太郎

研 究

世界大戰前に於ける英領印度の金爲替本位に就いて……………

經濟學士 松岡孝兒

不定期船衰頹の諸原因に關する基本的考察……………

經濟學士 佐波宣平

ヴィクゼルの自然利子論……………

經濟學士 青山秀夫

取引所の公定する相場に就て……………

經濟學士 今西庄次郎

說 苑

株仲間の冥加金につきて……………

經濟學士 宮本又次

デイルタイの歴史研究に於ける資本主義觀……………

經濟學士 出口勇藏

附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

ディルタイの歴史研究に 於ける資本主義觀

出口 勇 藏

一

こゝに取り上げる問題は、「ヘーゲル以後に於ける精神史の最大の歴史家」¹⁾と稱せられるディルタイの歴史研究を通して、彼に於て「資本主義」が如何に把握せられたであらうかと云ふ事である。ディルタイの歴史研究には、資本主義そのものを對象とし又は多くの關心を寄せてゐる勞作は存在しない。それは二つの理由に基づく。一は彼の歴史の特質(後述)であり、他は彼の研究の對象が十九世紀の初頭までに限られたと云ふ事である。即ちその對象は、現代の如く資本主義が社會の全領域に顯著な矛盾を露はにしてゐなかつた時代(特に彼が力を入れた獨逸に於ては)までに限定されてゐるのである。けれども彼の如き慧眼にして豊富なる歴

史家にして後に人類に一大課題を課する資本主義の把握が全然排除してゐる筈がない、又あるべきではない。こゝに彼の歴史研究より彼の資本主義觀を窺知せんとするは、現代の課題に答へんとするわたくしの欲求のためであると共に、又ディルタイの歴史研究に於て、彼の方法論自身の適用を知り、その反省に資せんことを期するためである。蓋し歴史の研究方法の具體性は、その研究實踐の結果たる歴史敘述に於て如實に認識しうるであらう。

二

わたくしは近代科學の理解を讀者に得るために、それとの對比に於て、中世から書き起さねばならない。中世に於ける形而上學即ち「實體的形式の形而上學」²⁾(*Metaphysik der substantiellen Formen*)は、社會を對象とする部門にあつては「神政政體的な社會の形而上學」³⁾(*theokratische Metaphysik der Gesellschaft*)である。「中世に於ける社會の外的體制的説明を組成する要素の中最も重要なものは、教會觀である。これは中世の社會觀の神政政體的性格を規定した。あらゆる等級秩序の精神的

1) Ueberweg, Geschichte der Philosophie. IV Teil, S. 551.

2) 資本主義の體系的構造に關する Dilthey の見界に就ては、本稿に於ては觸れない。

3) Dilthey, Einleitung in die Geisteswissenschaften (Ges. Sch, Bd. I) SS. 301 ff. 邦譯「精神科學序說」(大思想全集八十三卷) 167頁以下。

4) ibid. S. 348 邦譯前掲、230頁。

實體は、教會に於て一の神秘的團體にまで結合せられた。この團體は教會に最も近き三位一體や天使から、教會の門前の乞食、教會の隅の隅で恭しく跪きながらミサの犠牲を戴いてゐる奴隷にまで及ぶ。……社會内に於ける教會の權能は、一方に於てそれが權能である以上法律命題によつて叙述することが出來、從つて法律秩序、宗規に分歧せられる。そして他方に於て、神から由來するものである以上、人間社會に於て最高の妥當性を有するものである。かくして頭と四肢とより成る全體としての教會觀が生じた。この全體の中には、その身體として、超越的世界からこれに轉移せられ、神の救済の手續を行ふ統一體が宿つてゐる。教會は、この身體の魂として最高の權能を以て最高の目的を實現する。この目的と比べるならば、政治的秩序を生かしてゐる全ての關心は單に手段に過ぎないのであるから、全ての政治的秩序は教會に從屬してゐる。⁵⁾

この思想を理論的に敘述した者は神學者である。彼等は、「國家をキリストの神秘的身體たる教會に役立つ道具として之に從屬せしめた」⁶⁾から、法は教會の法と王の法とに分れる。教會の法は即ち神の法・自然法であり、之と矛盾する國家の法律・命令は拘束力なきものであつた。

「中世のこの神政政體的社會秩序は、西洋の從來の政治的原理の代りに、神から由來する權威の原理を置いた。こゝに於て活動してゐる見解は、中世に於ける全社會觀を變革した。今や法學に於ては、團體 (Korporation) の概念が生じた。……政治學に於ては、國家の諸概念の神學的基礎付けが生じた。それと結びついて一般的形而上學に基づき、當時知られてゐた歴史的社會的現象の全實在を包括した最初の社會の形而上學が生じたのである。⁷⁾

我々は此の形而上學を特徴づけるために、その人間學と國家觀とを見やう。人間學は、精神科學に於ける基礎理論であり、國家生活は、人間の社會生活の古來よりの最も具體的な生活形態であるから。

一 人間學 神政政體的な社會の形而上學は、當時のキリスト教即ちカトリック教意識の内に存する。この意識に於ては、意志がその獨自の形而上學的性格を持つ。ギリシャ人の審美的科學的態度と相違して、ローマ人の生活の中心點は意志である。⁸⁾「支配・自由・法律・權利及び義務の諸關係に於ける意志の位置は、此の場合、世界の理解及び形而上學的な概念構成の出發點を作つてゐる。⁹⁾「アウグスティヌスに於ては、彼が判斷

5) ibid. SS. 377-339 邦譯、同書、216-219頁。

6) ebenda (邦譯、同書、219頁)

7) ibid. S. 340 (邦譯、同書、220-221頁)

8) Vgl. Dilthey, Die Grundmotive des metaphysischen Bewusstseins (Ges. Sch. Bd. II. Zusätze SS. 494 ff.) 邦譯、江澤讓爾譯「文藝復興と宗教改革」附錄 225頁以下。

に於て意志の承認の要素を強調した事によつて、知識そのものを意志に従屬せしめ、知識は信仰となつた。而もこの意志は神の意志に外ならない。そして感情は、神の意志に叛くもの・悪魔として排斥せられた。従つて人間學は、神學の一部であつて獨立に考察されてはゐず、又人間性に於ける意志の此の過重は、文藝復興期にも及び、マキャベリーに於て見られるところである。

國家觀

神政政體的な社會の形而上學に於て

は、國家は「神の國」と「世俗の國」とに分けられる。そして「世俗の國」は、利己心の創造であり、惡魔的國家なりとせられ（アウグスティヌス）、¹⁰⁾國家生活の課題は、人間の宗教的目的を可能ならしめる制約の體系を實現する事に存するが故に、世俗の統治權は僧侶階級に従屬せしめられ（トマス・アクィナス）、¹¹⁾國家生活をより高く評價するダンテにあつてさへも、政權と宗權とを同時に神から直接に由來する二つの權力と見、國家生活の目的即ち一般的平和を保證する國家の形態、即ち君主

國に於ける皇帝は、哲學的洞察によつて「この世の生活の福祉」のために努力すべく、法皇は人類を啓示真理によつて「永遠の生活の福祉」に導くものと規定せられる。¹²⁾

上述の中世に典型的な人間學及び國家觀と並んで、中世の末期には、これらと對立する見界が表はれた。即ち人間學に於ては、神の意志は個人の意志に取つてかはられ、國家の政治的意志と支配權とをも、個人の意志から導出せんとする見界が之である。この近代的政治思想の黎明と從來の典型的なる見界との矛盾は、イタリアの自由都市の自己支配とローマのストアの思想の復興と共に益々顯著となり、文藝復興及宗教改革なる社會的・精神的變革を経て近世に入るのである。¹³⁾

近代への變革に於ける特徴は、社會の諸目的聯關即ち諸文化體系（Kultursysteme）の分化と獨立化の實現及び個人の獨立化である。

「宗教・科學及び藝術の獨立化の増大、人類の團體生活に對する個人の自由の増大に於て現はれる精神的文化の狀態のこの變化は、今や形而上學がその從來の歴史的役割を演

9) Dilthey, Auffassung und Analyse des Menschen im 15. und 16. Jahrhundert. (ibid. S. 9) 邦譯、同書、20頁。

10) Dilthey, Einleitung (Ges. Sch. Bd. I) S. 343 邦譯、前掲、224頁。

11) ebenda 邦譯、前掲、225頁。

12) ibid. SS. 344—345. 邦譯、前掲、226—227頁。

13) ibid. SS. 347—348 邦譯、前掲、229—230頁。

じ終つたと云ふことの最深の理由、近世人の心理的構成それ自身に含まれてゐる理由である。ルターやツッヴィングリが內的經驗に基づけたキリスト教、今やリオナルドが現實の神秘的な深奥を捕捉するものと説いた藝術、ガリライが經驗の分析をなすべきものと定めた科學、これらが、その生活表現の自由性に於ける近代意識を構成した。

……古代と中世とは、科學に世界の謎に對する解答を、現實に最高の理念の具體化を、求めた。かくて現象の理想的意義の觀察 (Betrachtung der idealen Bedeutung der Erscheinungen) が、その因果的聯關の分析 (Zergliederung ihres ursächlichen Zusammenhangs) と混ぜられた。今や科學が宗教に取換らんとすることなく、宗教から分離したことによつて、因果的研究は、この虚偽の結合から脱して、生の要求に近づく様になつた。人々は、超越的客體への抽象的推理、此岸 (Diesseits) から彼岸 (Jenseits) へ引かれてゐた形而上學的蜘蛛の網に厭き、而も現象の背後の眞理への誠實なる努力は存續してゐた。かくしてロマン民族は、外的自然及び世俗世界の經驗に心を向け、北方人は先づ宗教的經驗に心を向けた。¹⁴⁾

かくて生いた近代の知的發展の擔當者は、中世のそれが僧侶であつたのに對して、文學者・著作家・大學教授 (——大學は當時都市又は進歩的な君主によつて建設又は

改良せられた——) なる新しい階級に屬する人々であり、近代科學は次の如くに特徴づけられる、即ち「經驗に與へられたる現實を、因果的聯關の探求により、次に複雑な現實のその要素への分析、特に實驗によつて研究すること」¹⁵⁾。

自然科學に於て生じた此の近代科學的精神は、その發達につれて、その固有の對象たる自然を越えて、人間的・歴史的・社會的實在を對象とする精神科學の部門に迄侵潤し、こゝに一の體系を構成した。之をディルタイは、精神科學の自然的體系 (das natürliche System der Geisteswissenschaften) と名づける。「我々は、自然法・自然神學・自然宗教等々と稱する理論を、此の名を以て示す。その共通の標識は、人間が心理學的方法に従つて研究されるか、生物學的に説明されるかに關せず、人間に於ける因果的聯關から社會現象を導出すると云ふ事であつた」¹⁶⁾。此の體系の確立は自然科學に於てよりも遙かに徐々たるもので、十七・十八世紀に於て完成されたのであるが「自然科學の基礎付けと同様

14) ibid. S. 356 邦譯、前掲、240—241頁。

15) ibid. S. 357 邦譯、前掲、241頁。

16) ibid. S. 379 Anm. 邦譯、前掲、269頁。(傍點は出口)

に、それ程確實なものでないにしても、大がかりな創造¹⁷⁾であつた。

デイルタイに従へば、精神科學の自然的體系を成立せしめた理念は、一、宗教的理念、二、ローマのストア三、自然科學である。しかし之等種々なる精神力は、自然的體系の形成への方向に於けるその聯關とその統一的な力とを、當時の宗教的及び政治的欲求からして初めて得たのであつた。¹⁸⁾以下にその簡単な説明を加へやう。

一、宗教的理念 精神科學の自然的體系の將來に與つて最も力ありしこの理念を生ぜしめたものは、舊教のセクトへの分裂、新・舊教間の教義を廻る論争及びこれに伴へるヨーロッパの戰時狀態である。人々は平和を希望し、すべて宗教の中には共通的なものがなければならぬと考へ初めた、之人間理性の成熟を物語る合理主義的思想の端初であり、その表現が自然宗教であり、又自然神學である。¹⁹⁾

二、ストア 上の神學者の思想が哲學者・科學者に

デイルタイの歴史研究に於ける資本主義觀

移つたことに關しては、ローマのストアの思想の影響が甚だ大である。デイルタイが詳細な研究を遂げてゐるドイツに於けるこの體系の最初の完成者、メランヒトンの人間學・道德哲學・數學・物理學・宗教哲學等に於て一貫せる原理は自然の光 (lumen naturale) であり、一切の理論を之に還元してゐるが、lumen naturale とはシセロより出するものである。²⁰⁾

三、自然科學 この體系に於ける自然科學の影響とは、前述せし如く、その方法が精神科學の領域に持ち込まれたことを意味する、

然らば此等の三要因をして自然的體系形成に與りした時代の要求とは何であつたか？一言にして云へば市民社會の要求である。中世の封建的社會組織が新興の自由都市に於て崩壊し、あらゆる價值の轉換が起りつゝあつた當時には――

「都市の産業的勞働、商業及び醫學に於けるこの社會(市民社會のこと――出口)の進歩的實踐的目的は、至るところに新しい課題を含んでゐた。都市の増大しつゝある不安な人口がヨリ改良された生産手段及びヨリ敏速なる海上交

17) ebenda 邦譯、同所。(傍點は出口)

18) Dilthey, Dss natürliche System der Gisteswissenschaften im 17. Jahrhundert (Ges. Sch. Bd II S. 93)

19) Vgl. ibid. SS. 93—153.

20) Vgl. ibid. S. 153—224.

通を願つた此の社會には、古き大學に於けるスコラ的な論戰術が何の役に立つたらう？ 只試み・計算・發見・經驗の道にのみ、思惟は生の要求を満足せしめることが出來たのである。而して今や此の近代的課題がそれから發生したこの新しい市民社會には、又その課題の解決の近代的方法が横はつてゐた。何となれば、その中には、勞働する手と科學的精神との古代的分裂 (die antike Trennungen der arbeitenden Hand von wissenschaftlichen Geist) への反對に、産業勞働と科學的反省との創造的な結合 (die Schöpferische Verbindung der Industriearbeit mit den wissenschaftlichen Nachdenken) が形成せられたからである。自由なる市民社會の内部に於ける勞働と研究的精神とのこの結合は、理性の自律と支配の時代を將來したのであつた。²¹⁾

かくして成生した精神科學の自然的體系の著名なる著述家は、ボーデン・グローティウス・ホッブス・スピノザ等である。次に我々は、中世の形而上學を特徴づけるためになした様に、此の體系の人間學及び國家觀を檢討しやう。

一 人間學

既述の如く、中世の人間學の崩壊は、既に中世の末期より初まる。新しく生れた人間學は、この體系一般と同じく時代の要求より生じたもので、²²⁾

その共通的特徴は、(一)自然科学より來れる「論理的數學的形而上學的命題による現象の構成」と、(二)デカルトの影響より生ぜる「この構成せられた現象の眞實性を意識の原則より抽出せんとする欲求」である。²³⁾ 此の人間學の課題は、「心的生命の因果的聯關を支配する法則の確立」にあるが、之近代の説明的構成的心理學の根本命題である。理性の自律の段階に到達した人々の眼には、人間は「心的物的機械體」(psychophysische Mechanismus) なる抽象的圖式と映じ。人間の心的狀態の最高の原則は、自己保存であつた。²⁴⁾

この人間學を代表する者は、特にホッブス・スピノザである。人間學を哲學の一部内として掲げるホッブスにあつては、人間とは物理的小部分の一體系 (ein System von physischen Teilchen) であり、心的生命の諸事象は自然のテキストに於ける挿入物に過ぎず、生の構造聯關とは、心的生命の諸職能を可能ならしむる肉體の自己保存に協働する聯關である。かくして近代的自然主義者たる彼は、人間を唯物論的個人主義的に把握

21) Dilthey, Die Autonomie des Denkens im 17. Jahrhundert (Ges. Sch. Bd. II S. 257, 258)

22) Vgl. Dilthey, Anthropologie des 16. und 17. Jahrhunderts. (Ges. Sch. Bd. II S. 441)

23) Vgl. ibid S. 453.

24) Vgl. ibid. S. 251.

し、人間學は心的生命の形態學及び生理學となる。²⁷⁾ スピノザは「エティカ」に於て、精神・感情の起原・性質、感情・悟性の力を研究してゐるが、その方法は幾何學的演繹であり、精神は徹底的に因果聯關に於て構成的に把握されてゐる。

二 國家觀 國家觀は人間學に基礎を置く、その人間學が個人主義的構成的であるやうに、國家も亦個人主義的分子論的に把握せられる。自己保存を精神の最高の原則と見た理性に目覺めた人間の社會生活の基礎は、人格の自由・私有財産・個人の私法的義務の妥當と云ふことであり、彼等は法律生活には自然法を、國家生活には國家契約説を要求した。「國家契約は、彼（ボーンダン―出口）及び當時の全ての偉大な法律學者・政治學者の自明的な基礎であつた。」²⁸⁾

ディルタイは「十七世紀に於ける精神諸科學の自然的體系」の末章「生及び世界の形態（Gestaltung）―自然的體系の結果（Konsequenzen）」に於て次の如くに書いてゐる。（註二）

「自然的體系は、最初はローマ法學による法律秩序の變革（Umgestaltung）に作用した。このことは、資本に對する自由なる運動を要求した産業及び商業への移行によつて條件づけられた。……ローマ法學は、私有財産法・家族法・國法の中に、個人人格をその聯關から解放した。意志が主權的に協動する契約は、あらゆる法的關係の根本形式となつた。それより生じた結果²⁹⁾は、この點を越えて國法にも及んだ。國法一の要求は、封建的秩序から政治的職能を解放すると云ふことの中にあつた。國法は抽象的な個人の假定の下に、契約に基いて組成せられた意志が國家契約を形成したとすれば、又國家契約を解消することも出來たのである。經濟生活の内部では、自然的體系は資本主義³⁰⁾と云ふ怖るべき結果を齎した。可動的な資本は、近代法律秩序の内部で、嘗てローマ帝國の秩序の内部でしたやうに、無制限に權力をふるつてゐる。資本はその欲するものを倒すことが出來、その望むものを把えることが出来る。それは數千の眼と鉤腕³¹⁾とを持ち、行かうとする方には何處にも行くことの出来る野獸に等しいものである。」²⁹⁾

更に又「現在資本主義は、農業經濟を貨幣に從屬せしむる事によつて、その最後の結果を獲得してゐる。」³⁰⁾こゝにわたくしは讀者の理解を得るために、この章の意味を説明しなければならぬ。「生及び世界の形

25) Vgl. ibid. SS. 439, 440.

26) Vgl. ibid. S. 460.

27) Vgl. ibid. S. 461.

28) Dilthey, Die Autonomie des Denkens im 17. Jahrhundert (Ges. Sch. Bd. II. S. 274)

29) Dilthey, Das natürliche System der Geisteswissenschaften im 17. Jahrhundert

態」とは何であらうか？

ディルタイは、彼の範疇論「生の範疇」(Kategorien des Lebens)の中で次の如くに述べてゐる。

「……形態は生の一の普遍的な屬性である。我々が生を深く觀察するならば、どんな貧しい魂にも形態はある。我々はそれを最も明瞭に偉大な人間が歴史的運命を持つところで見るのであるが、生の経過に於て形態を含んでゐない程貧しい生は存在しない。心的生の構造及それに基いて獲得せられた心的生の聯關が、生の恒常性を形成し、變化及變轉に於て表はれる所で、所與の諸關係が過ぎ去つた時には、形態となるのである。³⁰⁾……」

形態とは、生の一屬性であり、生がその實踐的構造に従つて、生及び世界に働きかけ、*fortgestalten, weiterbilden* したその結果が、後の時代には一の形態として歴史的社會的實在の上にその跡を遺すのである。ここに云ふ資本主義も之と同様であつて、人類の知的發展の途上に表はれた精神科學の自然的體系を以て人類が生を *fortgestalten* した結果が、逆に人類を捕え、引きづり廻はさすにおかぬ怖るべき野獸として客觀化されたのである。

〔註一〕此の章は本論文が發表された1894後に書かれたものであつて、遺稿から全集の編者が附加したものである。

〔註二〕資本主義に就て、Dilthey は他の場所で一言觸れてゐる。"Die Sieger von 1688, Adel, Kapitalismus und Hochkirche, im Besitz des Parlamentes" (Dilthey, Das achtzehnte Jahrhundert u. die geschichtliche Welt, (Ges. Sch. Bd. III. S. 245))

三

以上は、ディルタイの歴史研究を通して見た彼の資本主義觀の紹介であるが、我々はここに注目すべき若干の點を見出す。

第一は、資本主義の淵源に關してである。資本主義てふ結果を齎した生の構造は、その源を遠く中世の末期より近世の初頭に於て端を發してゐる。資本主義は、市民社會の要求に刺戟された諸文化體系(宗教・哲學・科學等)が協働して精神科學の自然的體系を完成し、その形態として把握されてゐて、只單純に・公式的に經濟生活なる一文化體系のみより理解されてはゐないのである。

(Ges. Sch. Bd II. S. 245) - 傍點は出口。

30) *ibid.* Anm. S. 520. - 同上。

31) Dilthey, Plan der Fortsetzung zum Aufbau der geschichtlichen Welt in die Geisteswissenschaften (Ges. Sch. Bd. VII SS. 232, 233.)

第二に、資本主義を將來した理念を説明するに當り彼は詳細にその人間學を展開してゐることが注意さるべきである。人間學を基礎理論となす彼の方法論の具體的適用をこゝに見ることが出来る。

第三に、彼が資本主義を將來した理念の歴史的意義を認めてゐることが注意される。彼によれば、精神科學の自然的體系は自然科學の基礎付けと同様に「大がかりな創造」³²⁾であり、「精神諸科學は、この體系に於て初めてその獨自の中心、即ち人間の本性を見出した」³³⁾と云つてゐる。

第四に、ディルタイも亦資本主義社會を人類社會の最も合理的な社會組織とは考へなかつた。それどころか彼は資本を價值判斷して「野獸」となし、資本主義を目して精神科學に關する不完全な理念を以て歴史的社會的實在を指導した「怖るべき結果」となし、それに對する憎惡は、精神科學の自然的體系を論ずる歴史研究を發表せし後に、手稿に於てそれに添加すべき新たな一章を書かした程、それほど強烈であつた。

第五に、然らばディルタイは、資本主義社會組織を如何なる社會に止揚すべしと考へたであらうか？彼はこの點に就て明確な表現を與へてはゐない。だが次の事は惟惻して誤りはないであらう。資本主義は精神科學發達の一段階たる自然的體系の結果（客觀精神への表現）と考へられた。その様に將來社會も亦、ヨリ進んだ精神科學の段階の結果でなければならぬであらうと云ふことが之である。彼に従へば、精神科學は自然的體系を経てライプニッツ以後より發展史的段階に移る。³⁴⁾その中心思想は「個性」と「發展」であり、下つてヘーゲルにまで及ぶと考へたが如くである。故に恐らくは、彼が唱えた精神科學の基礎付けの上に建設さるべきディルタイ的段階を獲得することによつて、資本主義は止揚さるべしと信じたであらう。

最後に、上の憶測の上に立つて、わたくしの貧しい疑問を述べて此の紹介を終らう。

ディルタイは資本主義を、歴史的發展に於て、價值評價に於て、歴史的意味付けに於て、或は又實踐的方策

32) 前出。

33) Dilthey, Einleitung (Ges. Sch. Bd. I S. 379) 邦譯、前掲、269頁。

34) ibid. SS 380 ff. 邦譯、前掲、270頁以下。

の觀點に於て把握してゐる。之は實踐科學的把握として誠に正しいと云はねばならぬ。けれども次の社會組織に至る實踐的契機が資本主義自身の内部的構造の中に見出されること少く、ために資本主義に對する嫌惡が感傷的な慨嘆と感ぜられもする。

勝義に於て歴史家であつたディルタイの歴史は精神史と呼ばれえやう。そこでは客觀精神は、その上に絶對精神の花が咲く場所として顧みられて、本質的には絶對精神の高みから歴史が編まれる。この點に關して我々はディルタイの方法論を更に一步進めて、ヘーゲルの哲學體系の具體性に於て之を生かさなければならぬ。歴史は客觀精神と絶對精神との矛盾・統一の辯證法的關係に於て認識されなければならない。(註)

〔註〕 本稿でわたくしは Dilthey の歴史の方法論を論する餘白を持たなかつたのは遺憾である。